

最終講義

歩み出し：

解釈学的神学へ

2023年1月18日

同志社大学神学部

石川 立

■第1部

「原点」から哲学、神学へ「それる」まで、そして、現在の「研究」に至るまでを語ろう。

■第2部

「原点」を見つめ直す。そして、現在の関心も、これからの学びも「原点」から「それていない」ことを確認したい。

出エジプト記3章1-3節



シャガール画

[Gentle Reign: I AM \(I am not\)](http://GentleReign:IAM(Iamnot)rorycooney.blogspot.com)
rorycooney.blogspot.com

さて、モーセはそのしゅうと、ミデヤンの祭司エトロの羊の群れを飼う者となった。そして、群れを荒れ野の奥に導いて、神の山ホレブに来た。すると、柴の間で燃え上がる炎の中に、主の使いが現れた。彼が見ると、柴は火で燃えていたが、燃え尽きることはなかった。そこでモーセは言った。「道をそれてこの大いなる光景を見よう。なぜ柴は燃え尽きないのだろう。」(聖書協会共同訳)

燃える柴

惹かれてモ―セ道を逸る
寄り道多き人生重ぬ



ネッカー河畔のテュー
ビンゲンの町。
ドイツでは、町の中に
大学が点在する。

[\(Neckarfront Tübingen\)](http://Neckarfront_Tuebingen)
(tuebingen-info.de)

愛知県立
時習館高校
[時習館同窓会東京支
部 \(jishu-tokyo.com\)](http://jishu-tokyo.com)





大学封鎖 某大学
[無題ドキュメント \(shiro1000.jp\)](http://shiro1000.jp)



1969年1月の東大(本郷)
東大の象徴安田講堂を
占拠する学生たち

[テリー伊藤と東大安田講堂事件](#)
[- エルペディア【Wikipedia】](#)
[\(rubese.net\)](#)



1969年1月の東大正門。銀杏並木の向こうに
安田講堂がある。

<https://oyakochoco.jp/blog-entry-3226.html>



1969年1月18日東大正門。機動隊装甲車の突入。

<https://oyakochoco.jp/blog-entry-3226.html>



1969年1月18日
いわゆる安田講堂事件。
学生を排除する機動隊

『安田講堂の攻防』 ~インターナショナル- ひまわり博士のウンチク (goo.ne.jp)



1969年1月18日。54年前。

[テリー伊藤 と 東大安田講堂事件 - エルペディア【Wikipedia】 \(rubese.net\)](#)

根源的な問い

- 人はなぜ生きるのか、私は、他の人ではなく、なぜ私なのか。
- 「歩かうと思へば歩くのが自分に違ないが、其歩かうと思ふ心と、歩く力とは、果して何処から不意に湧いて出るか…」(夏目漱石『行人』より)
- (学校に対して)これが教育か！



学問のすすめ 17

倫理学のすすめ



佐藤俊夫編

- I 倫理の基底としての習俗
- II 行動の条理としての倫理
- III 人間の「間」と倫理
- IV 狂気の意味するもの
- V 倫理学を超えるものから

「人間」の本質を追究し倫理の根源的意味を
問いなおし、新しい倫理学の建設を志す

○このシリーズを心からすすめる

久野収<哲学者> 確実な知識 それのみがわれわれの未来をひらく

松田道雄<評論家> 自分の頭でものを考える人にすすめる

筑摩書房 分類 1312 製品 03117 出版 4604 ￥550

佐藤俊夫 編
『倫理学のすすめ』
筑摩書房
(学問のすすめ17)
1970年、表紙

根 拠



序 和辻教授最終講義の話

昭和二十四年（一九四九）早春、東京大学文学部第十一番教室では、和辻哲郎教授の停年退官最終講義が行われていた。教授は、ドイツ留学中偶々出席されたヴィラモヴィッツ・メレンドルフ教授（古典学・U. von Wilamowitz-Moellendorf, 1848-1931）の最終講義の模様を想起され、すでに八十有余歳であったこの老碩学の、なお教壇を去るに忍びぬ愛着の衷情涕涙に迸る場面を紹介されたあと、これと対照してわたしは少しも早く新しいひとと交替してもらおうのがたのしみなのだが、と前置きしながら、若き日より歩みこられたわが国「倫理学」の途を回顧された。それは、一方に個人、他方に一般者としての社会という両契機、すなわち前者の側にキルケゴールやニーチェ、後者の側にマルクシズムといった代表例をみる両方向からの限定を、「否定媒介」しつつ、「人間の学としての倫理学」の全体を形成してゆかれた途の明晰な跡付けであって、教授の白樺典雅な風貌と明朗澄徹な声量と相俟ち、まことにわが国「倫理学」の実質上の創造者たる教授の教壇の最後にふさわしい美しさに満ちたものであった。当時、法学部での「学問」にどうにも飽き足らぬまま卒業し、学問の根本への抑えきれぬ疑問に駆られながら文学部に転じた筆者は、静麗の講筵の末に侍しながら、この高名な教授の、作品のごとき生涯と講義の結晶が心持よいリズムとなつて、わが魂に流れ入る甘美に浸っていたが、やがて「和辻倫理学」の全貌が浮彫りにされたところで、しかし、と教授は辞を改められた。以上のべたところは結局はこの世の中

佐藤俊夫 編『倫理学のすすめ』
筑摩書房（学問のすすめ17）、
1970年、243頁



雰囲気はずいぶん異なるが参考のために（某大学・演習室）：
[文学研究科棟 9階 909 演習室（文学部） | 東北大学 施設・設備利用案内 \(tohoku.ac.jp\)](#)







瀧澤克己 (1909-1984)

S・ヘネッケ、A・フェーネマンズ編『カール・バルト＝滝沢克己往復書簡 1934-1968』寺園喜基訳、新教出版社、2014年 表紙より



瀧澤克己著作集 全10巻（法蔵館）
第2巻は「カール・バルト研究」

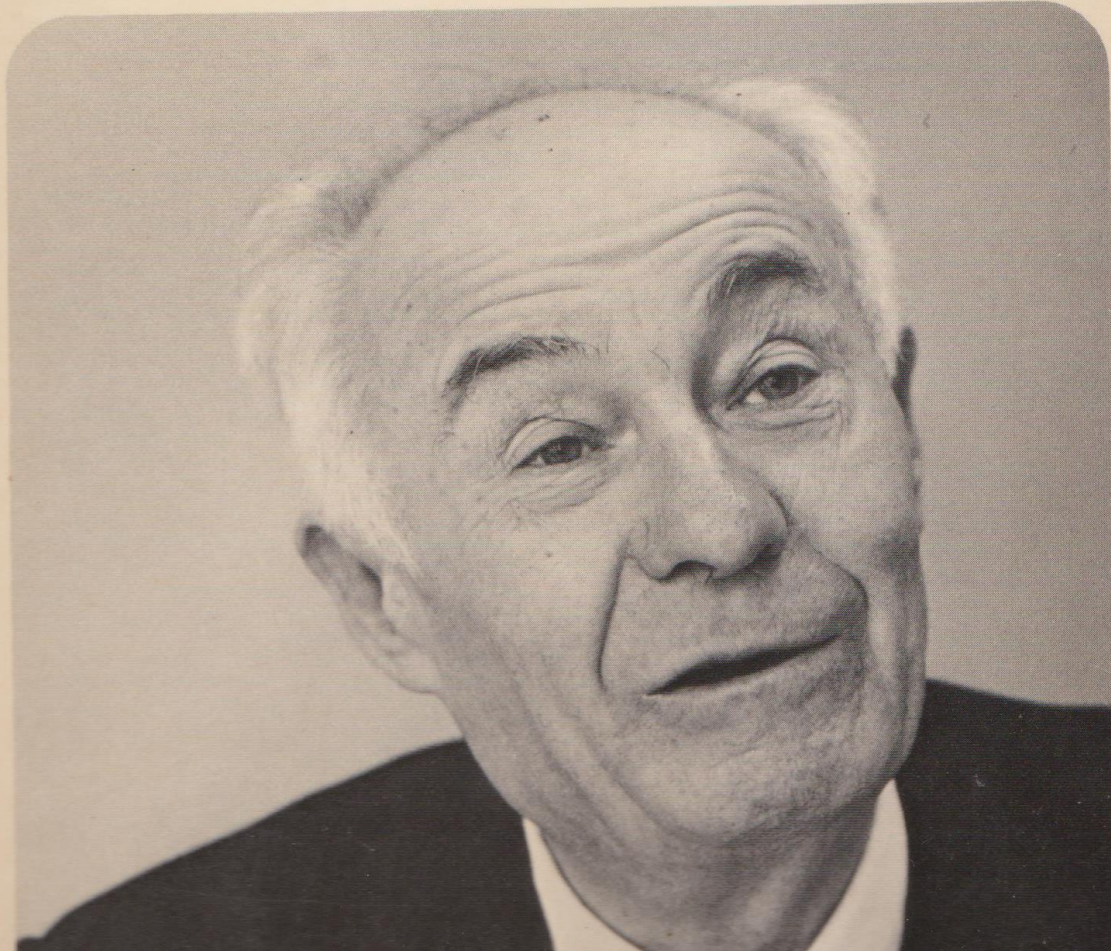
瀧澤克己著作集 全10巻(瀧澤克己著) / 古本、中古本、古書籍の通販は「日本の古本屋」(kosho.or.jp)



滝澤克己 (1909-1984)

S・ヘネッケ、A・フェーネマンズ編『カール・バルト＝滝澤克己往復書簡 1934-1968』寺園喜基訳、新教出版社、2014年 表紙より

ÉTOILÉE



**Gustave
Thibon
(1903-2001)**

Thibon, Gustave,
L'Ignorance Étoilée,
Paris: Fayard 1974, 表紙



チュービンゲン

チュービンゲン

[チュービンゲンー 大学生とゴーゲンの町 | ドイツ大使館 - Young Germany Japan \(young-germany.jp\)](#)



<http://www.seewide.com/space-article-id-275038.html>



クラーク記念館（旧神学館）
同志社大学神学部撮影

■第1部

「原点」から哲学、神学へ「それる」まで、そして、現在の「研究」に至るまでを語ろう。

■第2部

「原点」を見つめ直す。そして、現在の関心も、これからの学びも「原点」から「それていない」ことを確認したい。

私の原点： 井上忠の文章との「出会い」

10代のころの「精神状況」が井上忠の文章に出会った。

⇒ 出会うことで一つの理解が生まれ、一つの地平がひらかれた。

井上忠との出会い①

①一少年の苦悩を、ただの個人的な苦悩とせず、普遍的なものだと理解させてくれた。

- 「この無内容な自己の孤立化、異なりの潔癖さは、真に自己を充足させ包みきるなにか、つまり全体たる根拠への翹望であり、根拠との自己同一現前への熱願である。しかも根拠の隠れにより、この希求はいたずらに絶望、絶対の絶望と化しており、絶望せる自己の空しさは、一般者はもとより全事実界をもってしても充填されることはできない。」(p.260)
- 「全事実界を廃墟と化す異なりの厳しさの只中に、孤絶の自己として絶対と対決しなければならぬのは、人間・根拠の存在構造そのものの力動性である。」(p.265)

井上忠との出会い②

②少年の苦悩を、「孤となり」「異なり」としてあざやかに描いてくれた。

- ・「自己以外は一切の事象は、結局は一般者の地平に設定され、一般者によって限定されるに反して、ひとり自己のみは、一般者のうちにいかにしても包み込まれない存在であり、いわばやんちゃな存在であり、自己以外的一切を自己ではないと否定して憚らない存在である。いかに広範な一般者も、いかに内容豊富な一般者でも、自己のこの抵抗を包むことはできない。」(p.251)

井上忠との出会い③

③少年の苦悩は、例えば病気だと一般化して済ますのではなく、それは根拠の迫りだと教えてくれた。

- 「たしかに一郎(石川註:夏目漱石『行人』の主人公長野一郎)は精神科医からすれば立派な精神病者にちがいない。にもかかわらず一郎が神経症か精神病であるから、こうした不毛な緊迫が現成したのではない。そう考えるのはすでに病気という事実、いな本当は病気という一般者を根拠と考えることである。」(p.265)
- 「このようにして、平生人間がもっとも身近く狎れ親しみ、一切の根拠かのごとく思い込みがちな全事実を自己より崩落させ、われを絶望の孤絶に負うものは何か。家庭の親しみ、肉親のいたわり、恋人のなぐさめをも、一瞬のうちに、樹氷の冷たき淋しみと化し、遠き星の囁きよりもなお遠きに追い、いなわれとわが身の、われとわが心の、同行二人すらも許さず、われをただ異なりの荒野、不毛の砂漠へと出で立たせるもの、それこそは、事実を根拠と見誤り、一般者を真理と錯覚する人間の頹落に対する根拠からの手痛い警告である。そしてそれは同時に、かくまでにわれを独占し所有しようと、われ存立の骨髓を貫き来る根拠の愛の迫りである。」(p.264)

井上忠との出会い④

④ギリシア哲学やアウグスティヌスや十字架のヨハネへの案内。

- 井上忠の他の文章では、アリストテレスの研究とは、アリストテレスを一般者として解説することではなく、アリストテレスを同僚としてこれと対話することである、という類のことをしばしば述べている。
- 「例えば、自己省察の途を「自己よりもなお内奥なるもの」へと拓き、神もまたそこに住みたもう記憶の宏大をしめしたアウグスチヌス(Augustinus, 354-430)や、同じく自己の裡に想像を絶する神秘至高の風光を披いた十字架のヨハネ(San Juan de La Cruz, 1542-91)の、自己把握の限りない豊かさを想わずにはいられまい。」(p.266)

私の原点：

10代の頃の私の前に広がった地平・理解

•井上忠は、人が絶望に陥ることを一般者拒否として評価する一方で、絶望にとどまることを、根拠に対する身の閉ざしとして批判している。

。「自己は一般者（事実界）を拒否するが、内容はない。むしろ自己は、現実世界に身を披き、これを身近な事柄としていくときに、迫り来る根拠を迎えることができる。」

最後に 解釈学的神学①

- ガダマーの「地平の融合」については、これまでの講義の文脈で言えば、次のようにまとめられるのではないか。
- 「解釈とは、目の前に来るものを、一般者として拒否したり、遠ざけたりするのではなく、当方の身を披いて、目の前に来るものを、親しきもの、近しいものとしていくことである」と。

最後に 解釈学的神学②

•「解釈学的神学」とは、聖書を読者の実存に引き寄せて読み、また、聖書の中に読者の自己を投入して読む——このような読みにもとづいた神学、ということが出来るだろう。すなわち、聖書と対話すること。聖書を一般者にしてしまわない。一般者として解説して、付き合いを終わりにしない。聖書を親しきもの、近しいものとして、これに身を披いていく。あくまでも対話し、ガダマ一流に言えば、聖書との地平の融合をはかっていく。

⇒こうして聖書との出会いが生じる。出会いによる新しい理解が生じる。論理によってたぐりよせた理解ではなく、地平の融合という形の理解が生じる。

⇒これが啓示である、と言えないだろうか。

結論

- 以上の考察から、私の原点がそもそも解釈学的な出会いの事態であったと行うことができる。

⇒したがって、その原点と、現在の私の関心である解釈学、そして、次のステップとして定めている解釈学的神学は、しっかりつながっていると見ることができる。

最終講義

歩み出し：

2023年1月18日

解釈学的神学へ

終了